

10月のおはなし

「コスモスは香らない」

中

中央線では毎日のように人身事故が起きていた。

その夜もなかなか来ない電車を僕は待っていた。復旧の目処はつかない、そう繰り返すアナウンス。長い残業を終えてどろどろに疲れた心と体には、もはや怒りも焦りも起こらなかつた。

その時、向かい側のホームに電車が入線してきた。反対方向は動いているらしい。電車が停まり、扉が開く。暗闇に光るゲート、まるで僕をいざなうかのよう

うだ。でもそれに乗ったつてどこにも行けない。この徒労感と同じだ。

本当にそうだろうか、僕はふと思ひ直した。

僕は衝動的その電車に乗る。

終点まで乗ったら、また別の路線に乗り継ぐ。そうして日常はどんどん遠ざかっていく。何回かの終点を経て辿り着いた先は、小さな町の小さな駅舎。改札を出る。早朝の小さなロータ

リーには一台も車が止まっていない。駅前には古びた看板の羊羹屋が一軒あるだけ。反対側には視界の限り、収穫を終えた稲田が広がっている。

僕

は駅を出て、用水路沿い歩いて歩く。柔らかな風に吹かれて稲木に束ねられた稲穂がさらさらと音を立てる。休耕田に咲くコスモスと赤とんぼ。見上げると空はどこまでも広い。遙か高層を幾重にも筋雲が走っている。

時間を忘れて歩き続け、やが





て訪れる美しいオレンジの夕暮
れと少し肌寒い風。暑くもなく
寒くもない、季節の踊り場のよ
うな清々しいひととき。やがて
来る冬の予感。そんな故郷の自
然が僕の心を癒す。

全 ては妄想だ。僕はそんな
故郷など持たない都会の
住人だ。僕にとつてそんな原風
景はほとんどフィクションでし
かない。薄汚れた大気の底で、
空調の効いた部屋と部屋を、空
調の効いた車両で行き来するだ
けの毎日。一〇月はその他と判
別のつかない一二回のうちの
一つでしかない。コスモスの香り
だつて分からない。

家に帰ると、妻がダイニング

テーブルに顔を伏せて寝てい
た。僕を待っていてくれたのだ
ろうか。ふとテーブルに目をや
ると、グラスにコスモスが一輪
活けてあった。改めて彼女を見
る。そうだ、僕はここで世界と
繋がっているんだ。妻を起かさ
ないようにそつとコスモスに近
づき、匂いを嗅ぐ。けれど何も
感じない。

すると突然鳴り響く携帯電話
の呼び出し音。妻が起きてしま
う。慌ててポケットから電話を
取って電源を切ったが、鳴り止

まない。何故だ。振り返ると、
やがて妻が上体を起こし、目を
目 開けて僕を見た。
を覚まして、あなた」
彼女の声はなぜか携帯電話から
聞こえた。ぎよつとして携帯電
話を凝視すると、僕はベットの



中。右手に持った携帯電話からは繰り返すモーニングコールサービスの女の声。

眠

目をこすり、服を着て、誰もいないキッチンを横目に家を出る。薄暗い街を歩いていつものように六時四発の電車に乗り込む。覚めない夢のような泡沫の日々。うずまく妄想が天空をどんよりと隠し、電車が向かう地平に光明はまだ見えない。

携帯電話が震えてメールの到

着を告げた。そういえばサービスに二度寝防止のオプションを付けたのだ。画面を見ると、そこには「本当に起きた？」と書いてあった。■

5



妄想の地平線

10月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU